

宗教社会学の半世紀（一九四五—一九八九）^①

ジエームス・A・ベックフオード



イントロダクション

一九四五年から一九八九年の期間に、宗教社会学においてなされた数多くの様々な学問的貢献を知る者であれば、それらの文献に対して批判的かつ簡潔にして公平なコメントを加えることが容易であるなどと言うことは決してないだろう。事実、その作業は多くの理由から気の重いものとなっている。紙数の制約を守るという困難に加えて、私はさらに頭の痛い諸問題に直面せざるを得なかった。それは、多くの宗教社会学者が用いた言語以外

の言葉によって刊行された諸論文に対してどのように公平を期すかという問題と、宗教現象そのものの展開とは離れた宗教社会学の展開をどう扱うかという問題であった。

また、宗教社会学と、社会学全般で生じる宗教への付随的な考察との境界をどこに設定したらいいのかというさらなる困難が存在した。さらには、理論的認識の歴史に関して多くの刊行物が出版されているにもかかわらず、私がいまだに宗教社会学の包括的な歴史を見い出せないでいるということもつけ加えておく必要がある。

こうしたことが、宗教社会学者が抱いている下位領域への関心の欠如をはからずも明らかにするものであるとすれば、それは一九四五年当時の宗教社会学において明白であり、そして、それ以来強くなる一方の、実態への知的イデオロギー的関心の分散によるものであるのかもしれない。

私はこうした挑戦的な諸問題に対して、このレポートの扱う範囲に一部厳密な制約を設けることによって対処することにした。たとえば、きわめて名高い諸文献のリストを積み上げたり、可能な限りたくさんの文献に関する網羅的な要約を行うなどのことはしない。⁽²⁾ 斬新なやり方で多大な貢献をなすであろう諸理論の統合を行ってみたいという考えもないわけではなかったが (Weber, now, 1988 を参照)、こうした作業は、過去四十四年間にわたって宗教社会学の名の下に行われた様々な研究に関する回顧を主とするリポートには相応わしくないだろう。また、たんに業績を年代順に並べただけではまったくつまらないものになってしまう。

ここでの私のやり方は、主要な組織、ジャーナル、視

点、テーマ、コンセプト、理論、そして、宗教を社会的な観点から明らかにしようとする試みから生じる顕著な問題に関して、分析的かつ選択的に概観するというものである。私はこのことによってこのリポートを、時間、言葉や国家の境界、理論学派、そして経験上の専門領域を横断するセクションに分けようと思う。私は常に一つの疑問を念頭に置いておこうと思っている。つまり、第二次世界大戦の終結以来、宗教の社会学的理解はどのように展開したか、というものである。このことによって、概念的、理論的、経験的、方法論的問題にとどまらず、他の社会学の専門領域、全体社会の理論化における諸傾向、そして宗教の社会学的研究に及ぼす制度的状況をも包括することが可能になるものと考ええる。

組織

宗教社会学は、今では知的な分野、アカデミックな専門領域、そして研究者の共同体としてすっかり確立されてしまったために、一九四〇年代半ばには宗教の社会学的側面の研究のための社会的組織的枠組がまだまだ未発

達であったということをつい忘れてしまう。十九世紀から二十世紀の曲がり角における、いわゆる社会学の古典の黄金時代は、いくつかの真に優れた研究を生み出したが、その後はマルクス、ウェバー、テンニース、ジンメル、トレルチといった人々の考察を探索する研究者が現れないという長い休閑期が続いた (Beckford, 1988)⁽³⁾。対象的に、多くの研究者は、その中でもアルプヴァックス (Halbwachs) とモース (Maus) が著名であるが、デュルケムの視点を掘り下げていった。

多くの国々においてみられた現代の宗教社会学の制度化に関する最初の動きは、専ら宗教組織にいろいろな形で関与しようとした専門の社会学者、教会管理者、在俗の研究者の集まりから生じた。⁽⁴⁾ こうした「信仰」集団は一九四〇年代に力を伸ばしていったが、そうした人々が目指したのは、自らのために、もしくは社会構造や社会過程へ貢献するための宗教的方法論的吟味であり、社会状況の改善への社会学的知識の適用であった。この顕著な事例が、アメリカ・カトリック社会学会 (American Catholic Sociological Society (ACSS)) や C I S R の母体と

なったグループである。同様のパターンは、オランダで一九五三年の *Social Kompas* の発刊 (Godijn & Houart, 1983) やスペインでも生じている (Estruch, 1976)。⁽⁵⁾ フランスやイギリスを初めとしたいくつかの国々においては、それほど改良主義者の観点に立たない視点から宗教に関心を示した歴史家、哲学者、人類学者、社会学者の緩やかな連合が一九五〇年代に形成され始めたが、こうした国々においては異なったパターンが発生した。

たとえば、宗教社会学グループ (Groupe de Sociologie des Religions) の知的関心は、*Social Compass* の関心よりかなりの程度改良的でもなければ適応的でもない (Desroche, 1965)。会の内実は「適応」を中心としているにもかかわらず、このことはフランス宗教社会学会 (Association Française de Sociologie Religieuse) にも当てはめることができる。さらに、フランスの諸グループの歴史的比較的視点は、宗教の社会学的分析を、他の人文社会科学のより広い状況の中に位置づけた (Desroche & Sigauy, 1970)⁽⁶⁾。第二次大戦直後の復興期のドイツにおける宗教社会学への数多くの貢献は、ドイツ社会学会の宗教

社会学部会の関心と同様に、折衷的な範囲にとどまるものであった (Wach, 1944, 1945; Mensching, 1947)。

とりわけアメリカにおいて、純粹に宗教の社会学的側面に対するきわめて狭義の関心が大学の課程に現れ、そしてその結果、そうした関心が専門研究者集団やジャーナルにも見られることになった (Moberg, 1966)。規範的構造機能主義者の視点は、宗教を、人間社会の安定や存続のための特殊な機能を伴った別個の社会的制度もしくは特殊な社会組織として位置づけてきたが、より範囲の狭い方法的に複雑な形態の宗教社会学が、その特殊な様式から離れて大きく発展した (Nottingham, 1954; O'Dea, 1966 参照)。つまり、純粹に宗教の社会的側面が、どのようにして歴史的文化的政治的状况から社会学的目的のために相対的に分離されてきたかということである。その後、アメリカ・プロテスタント諸教派の市場調査や管理部門において社会学が利用されたことは、いっそう学分的専門分野を強固なものとした。

宗教研究学会 (Religious Research Association (RRA)) は、一九三〇年頃シカゴ地域におけるセミナーを基盤とした

は、理論と実証的調査にバランスのとれた、教団とは無関係な厳密に科学的な学会として一九四九年に発足した。その学際的な精神は、パリの宗教社会学グループとケベックのラヴァル大学 (Université de Laval) に所属する研究者に共通するだけのものではなかった。海外の会員が増大していったにも関わらず、SSSR (RRA や ASR と同様) は、もっぱらアメリカの組織にとどまっている。しかしながらそれゆえに、アメリカの高度な教育体系と多くの宗教組織という膨大な資源を利用することが可能である。アメリカ社会学に宗教セクションがないという事実は、他のアメリカの諸組織にも同調をもたらした。他方、国際社会学会 (International Sociological Association) の第二十二委員会 (Committee 22) は、これは宗教社会学であるが、こうした資源に依存することができず、一九五〇年代後半の中断以来、四年毎の国際社会学会議の活動維持や、機関誌の発行に支障をきたしている。⁽⁸⁾要するに、宗教の社会学への明確な関心が、様々な観点の中から宗教に関心を絞った専門家と教団関係の集団から生じるには、少なからぬ時間が必要であったと

調査研究者の研究会に端を発しているが、政治志向と教会志向の調査者をアメリカのプロテスタンティズムへと目を向けさせるのに重要な役割を果たした (Hadden, 1974)。アメリカ・カトリック社会学会は、結局はローマ・カトリックの研究者に対して宗教研究学会と同様の役割を果たすようになったが、一九三八年の創立時点においては、当然ながらカトリックの社会政策を論議するための研究会としての性格が強かった。ローマ・カトリック教会に対する社会学の関心は、一九五〇年代半ばまで明白にならなかった。宗教社会学会 (Association for Sociology of Religion (ASR)) が一九七〇年に ACS S の藩からかえって初めて、デノミネーションとは離れたより理論的な基盤に立った、宗教社会学におけるあらゆる知的疑問への関心が、カトリックの社会政策とカトリック教会の抱える具体的な諸問題に対する関心へと変わっていった。⁽⁷⁾

対照的に、科学的宗教研究委員会 (Committee for the Scientific Study of Religion) [一九五五年に宗教の科学的研究協会 (Society for the Scientific Study of Religion) になる。]

いうことである。

ジャーナル

こうした専門研究者による学問的な展開は、定期刊行物の軌跡に反映されている。Social Compass は一九五三年に刊行されたが、一九六〇年代の半ばまでカトリック的性質を払拭しえたわけではなかった。Archives de Sciences sociales des Religions と Journal for the Scientific Study of Religion は、その学際的な性格を保持し続けている。Catholic Sociological Review は一九五三年に基盤とする立場から専門研究者のジャーナルへの重大な出発点となった。イタリアのジャーナル Sociologia Religiosa は一九六〇年代初頭に発刊されたが、内容的には不十分であるように思える。同様に、短命であった Internazionali Jahrbuch für Religionssoziologie (1965-1973) の刊行は、Journal for the Scientific Study of Religion が北アメリカの急速に増大する宗教の調査文献のための刊行物として速やかに確立した直後であったに

もかわらず、特定の社会学論文のためのヨーロッパにおける適当なマーケットを開拓し生み出すことができなかった。The Sociological Yearbook of Religion in Britain (1968-1975) は、短期間ではあったが高い関心を集めたものの、イギリスの高等教育における学科としての社会学と命運を共にすることになった。Annual Review of the Social Science of Religion (1977-1982) は、宗教社会学のためにヨーロッパに非宗教的なマーケットを作り出すとして短い運命をたどった今ひとつの試みである。最も新しく刊行されたジャーナルに *Religione e Società* がある。

ヨーロッパにおける少なくとも四つのジャーナルの失敗と、*Social Compass* と *Archives de Sciences sociales des Religions* の控え目な刊行は、北アメリカにおける *Sociological Analysis, Journal for the Scientific Study of Religion*, *Review of Religious Research Sciences Religieuses* の持続的成長とは対照的である。さらに、アメリカの出版者は、近年宗教社会学の領域においていくつかの新しい著作シリーズや年報の刊行を開始している⁽⁹⁾。

ガーランド出版とグリーンウッド出版は、関連する話題に関する文献目録を現在も刊行している。そして最後に、北アメリカでは多くのコンピュータ化されたデータベース、ニューズレター、出版ダイジェストが、宗教に関する社会学的情報を普及させるのに役立っている。

しかしながら他方で、市場を拡大しつつあるいくつかのジャーナルや著作シリーズが足場を固めたからといって、同程度の重要性を持つ現象が看過されてよいわけではない。私が述べているのは、一般社会学のジャーナルにおいて、宗教社会学の領域の論文の掲載が減少しているように思われる点である。宗教を扱った論文が、たとえば、*American Journal of Sociology*, *Revue française de Sociologie*, *Canadian Journal of Sociology*, *Kölnner Zeitschrift für Soziologie*, あるいは *Rassegna Italiana di Sociologia* などに掲載されることはめったにない。こうしたことは、宗教社会学者が専門のジャーナルや特集号に論文を載せるように選択したことの結果かも知れない。そうでないとしたら、他の一部の社会学者が宗教を扱った論文の発表を推奨しようとしないうことの現れかも知れない。

知れない。理由はどうかあれ、こうした状況は宗教社会学の専門的立場にとつていい兆候とはいえない。また、フィルム、ビデオ、あるいは写真でもいいのだけれども、こうしたメディアを通して宗教社会学を進めていこうとする試みが比較的少ないという点も重要であろう。いわゆる映像社会学はしだいに人気を博するようになってきているが、宗教社会学に関しては、研究者のレベルでも一般のレベルでも影響はみられない。

最後に私の印象を述べれば、数多くのテキストブックや編集されたリーディングスのコレクションが、宗教社会学の課程で学ぶ学生に利用可能となっているが、こうした課程の内容や様式についてはほとんど知られていない⁽¹⁰⁾。アメリカ社会学会の年次会議の際にたまに開催される課程の教え方に関するワークショップを除いては、教え方に関する諸問題を論議する専門家の会議はめったにない。下位領域としての宗教社会学は、学的位置と手続きに関して比較的自省的ではない。特定された教科書や教授法がないために、下位学問の学的立場への関心は明らかに低くなっている。

要するに、北アメリカではさまざまなジャーナルが依然として活発に刊行されているのに対して、ヨーロッパではジャーナルはさまざまな運命をたどったのである。さらに、宗教社会学において活況を見たジャーナルは、社会学全般の関心から優れた論文を切り離してきたのかも知れない。

国際的鳥瞰

ヨーロッパの社会学者が「社会と教会」に関する問題に関心を抱いているように思われる一方で、アメリカの社会学者は宗教と他の社会制度との関係に興味を示しているようだ。カレル・ドベラーが述べてから (K. Doherty, 1968)、すでに二十年以上が経過している。また、アメリカは実証的測定へと向かう傾向があるのに対して、ヨーロッパは理論的、哲学的、歴史的アプローチを好むと指摘する研究者もいる (Moberg, 1966)。この広範な国際的分業は今日においても依然として見ることができるが、中間領域においては、二つのグループ間にある程度の相互的な、しかし不平等な影響関係が存在して

きた。つまり、西から東へという影響の方向が著しく強まってきており、その影響はイギリスとアングロ系カナダにおける学的貢献の増大によって、一九六〇年代半ばから大きくなっていると私は考えている。私は、アメリカ研究者がヨーロッパでの宗教社会学を意識している程度は、著しく低いのではないかと考えている。⁽¹¹⁾

しかしながら、大西洋の向こう岸から吹いて来る影響の風は、社会学の活動のより広範な国際的形態の一面にすぎない。同じく顕著な様相は、一九七〇年代初頭以来の宗教社会学への日本の貢献の増大にもうかがうことができる (Yanagawa & Abe, 1977⁽¹²⁾)。そして、専門研究者の数は多くはないものの、ラテン・アメリカの宗教社会学、とくにブラジル (Deelen, 1967) は、いくつかの興味をそそられる調査問題と分析をもたらし(いくつかの事例は、FERES、ベルギーやフランスの研究者と協同行われている)。同じく魅力的でしだいに洗練されてきた調査が、近年いくつかの東欧諸国から現れている。そこでの主要な問題は、もはや国家社会主義下で宗教意識や宗教行為が存続しているなどということではなく、より重要なのは、宗

かつてほどに顕著ではなくなっているが (Schneider, 1966: 210-11)。⁽¹³⁾ もっぱら参与観察による実証的研究とともに、イギリス人研究者の広範な理論的諸問題への関心の高さは、一九六〇年代以降も減じていない (Martin, 1967)。

それゆえに、ある程度まで宗教社会学者間の国による相違が存続しているが、同時に、分化によって生じた付加的過程が過去数十年の間に大きな問題となってきた。私が述べているのは、宗教社会学の増大する活動にともなう、たえず強まっていく専門化のことである。というのは、宗教社会学は、たとえば健康社会学や教育社会学のように、急速もしくは広範囲に展開することはなかったけれども、この領域における出版物は、依然として印象的なまでの高い増加率と専門化の傾向を示している。膨大な知識の集積は、初心者には威圧されるかのように映るかも知れない。科学的研究の他の領域と同様に、増加する専門化された情報量は莫大なものとなり、その情報の流布が大きな効果を及ぼすことになる。「情報という君主」を託つ者もいれば (Laeyendecker, 1984)、宗教社

教意識や宗教制度が公的イデオロギーとともに果たすことができる役割はどのようなものかという点である (Archives de Sciences sociales des Religions 61 [1] 1988 参照)。

こうした状況と比較すると、スリランカ (Houtart, 1967; Gombrich, 1971) と南アフリカ共和国 (Reinders & Welz, 1973) を除く、南アジアとアフリカにおける宗教の社会学的研究は、一九六〇年代以来、上記のような重大な発展の徴候を何も示していない。インド宗教の事例は、重要な人類学的視点と問題を含んでいくに興味深い。⁽¹³⁾

個々の国々の社会や文化における宗教現象の根深さを考えると、さまざまな国における宗教社会学者が異なった別個の方法で自らの研究を進展させようとしてきたことは驚くべきことではない。たとえば、イタリアの研究者はカトリシズムの政治的内容に敏感であり、日本人研究者は民俗宗教や新宗教に、北欧の研究者は民衆宗教や民間信仰に、ドイツの研究者は教会組織に、フランスの研究者は理論的思考の歴史やエキュメニズムに関心を抱いてきた。⁽¹⁴⁾ アメリカ人研究者の好む、宗教と社会システムの宗教以外の部分との機能的関係の研究は、現在では

社会学が他の大量の社会学的知識から孤立していることを憂う研究者もいる (Beckford, 1985)。

さらに、社会学的考察が、神学、教会史、宗教史といった隣接する領域において徐々に受容されてきたという事実が、社会学や他の社会科学内での宗教社会学の地位を上昇させたように思われるのである。たとえば、一九六〇年代以降、宗教社会学の調査のための研究費が、他の社会学調査への研究費と比較して、増えたかどうかは疑わしいのである。宗教社会学における調査費用が他と比較して少ない理由の一つは、宗教は、経済成長や国家の統制機能に対して直接寄与しない制度であり、費用を受ける調査として適切な科目に資格認定されにくいという厳然たる事実が存在するというものである。また、宗教が文化的に濃密で複雑な現象であるために国際調査が本質的に難しいという理由も考えられる。

研究テーマと概念

宗教社会学者が「宗教」という言葉の意味を依然として論議しているという事実は、概念的な特権や宗教の教

義は永遠不滅であるという勝利主義の主張に対する健全な懐疑主義の現れであるのかもしれない。(Herivel-Leger, 1987)。それでも議論は人類学、宗教学、宗教史において継続され活況を呈している。しかしながら宗教社会学は、研究に従事する者が実証的研究、とくに質問紙調査との関係において、そして宗教体験の他の研究の目的のために、用語を規定しようとしてきた情熱において、際だった動きを見せている。明らかに、あらゆるものを測定することができるとすることによって社会学的調査の信頼性を測定することが、とくにアメリカにおいて流行した一九六〇年代に、宗教の諸次元の調査は、実に熱心に行われた。宗教の次元に関するこの作業と、宗教の概念を「関与 (commitment)」の問題に狭めようとする傾向——方法論が概念を支配するという古典的な事例——には強い結びつきが存在する。その過程においては、集合的現象としての宗教の文化的社会的重要性はほとんど無視されている。孤立した個人の言葉に表された態度や信念の中にもっぱら宗教の証左を調査することが、個人化された宗教、あるいは、個人のアイデンティティ、感情、位

置との関連から規定された「宗教性」の存在を主として「見出した」ことは、なんら驚くべきことではない。予想とは裏腹に、常識宗教、慣習宗教、分散した宗教、民間信仰、曖昧な宗教、民衆宗教、非公式宗教といった新たに見いだされた関心は、確かに一九七〇年代以前の宗教社会学のかなりの部分を占めていた教会志向型のパターンから有意義な決別をしたわけであり、実際、宗教の狭い個人化という概念規程へ向かうものではなかった。宗教の隠れた、高度に分散したこれらの現れに関する新しい発見は、曖昧で内的矛盾を含むものであるにもかかわらず、集合的意味やさらには行為の基盤を表しているように思われる、共有された価値、感情、そして信仰の存在と重要性を明らかにしてきた(たとえば、Peele, 1987 と Cipriani, 1989 を参照)。このことは、たとえば、しだいに社会学者が巡礼 (Social Compass 29 [1] 1982 と 36 [2] 1989 参照) や、第二バチカン公会議に対する俗信者のきわめて選択的な反応、そしてその後の法王による回勅といった話題に注意を払うようになっていく点にうかがうことができる。

これとは対象的に、もっぱらアメリカで市民宗教が論議されたことは、規範的機能主義者の確信、つまり制度的分化が絶えず宗教組織を周辺化しているにもかかわらず、現代社会は引き続き宗教的価値によって導かれている、ということから提起された「終わりなき研究」への回帰を表している。市民宗教は、その自己破壊的な傾向から現代を救うと考えられる、文字通りの象徴的な急場を救うために登場する神 (deus ex machina) である。市民宗教のレトリックの持つイデオロギー的影響を分析することは現在でも価値あることかもしれないが、市民宗教をめぐる論議は、規範的機能主義者の枠組みの外では重要ではなくなっている。

他方、政治と宗教、政府と宗教、そして教会と国家との複雑な関係に関する社会学的理解には大きな進展が見られた(たとえば、Robbins & Robertson 1987 を参照)。不思議にも、こうした問題は、一九六〇年代以前の宗教に関する論議にはほとんど見られなかった。¹⁵ しかしながらそれゆえに、社会学文献において次第に主要な位置を占めるにいたっている。この問題は、機能主義的な観点か

らすれば近代化に関する多面的な議論として本来重大な意味を持つものであり、その結果、核兵器、戦争、環境破壊、貧困等の反対運動と市民権をめぐる抗争との関連で論議されている。宗教と政治をめぐるごく最近の問題は、一部のマルキスト及び文化的保守主義者の目に重要に映っているように思われる。インド、北アイルランド、スリランカはいくまでもなく、イスラム諸国に見られる政治への情熱と不安定さは、この関心を煽ることになった。しかしながら、アフリカのサハラ南部、アメリカ、そしてラテン・アメリカにおける国家と宗教組織との緊張関係は、これまで現代宗教は公的側面から見ると衰退を特徴とするという一部に受容された考え方に疑問を起こさせ、関心を惹起させた。国の世界体系 (world system) における宗教の重要性をめぐる論議が、新たな関心の焦点として浮かび上がってきた。こうしたことによって、宗教と権力との密接な関係に対する関心が高められてきたことを知ることができる (Beckford, 1983)。

宗教社会学において上記以外の数多くの新しいテーマを見ると、研究の関心が公式の制度化された宗教から他

へと大きく移動していることが分かる。新しいテーマは、一方で宗教の断片化を示し (Bibby, 1987)、他方で、現代における宗教の社会的重要性が公式の宗教組織の制約をはるかに越えているという社会学者の自覚が増したことを表している。

現象学的かつ言語的影響に対応したこともあって、たとえば、回心、入会の勧誘、棄教、そして脱会の問題が、一九六〇年代後半に、セクト的集団、大規模な教会、カルト・ムーブメントの研究において全面に現れた。この特殊な領域の調査は、結果として変わりつつあった社会学理論の様式とパラレルに展開した。心理学における剝奪やフラストレーションといった比較的因果論的なアプローチに代わって、回心や棄教のより積極的で想像的なイメージにふさわしい解釈的手段が登場した (Barker, 1984; Snow & Machalek, 1984; Richardson, 1985)。またミクロ社会学も、おおよそ同時にイギリス社会学とフランス社会学で花開いた日常世界の構造の研究に関心を示した。しかしながら、イギリス社会学における研究が分析哲学から発展したものであるのに対して、フランス社会

学のそれは歴史学的方法に基づいている。両研究は民衆の潜在的な宗教の研究を活発に行っている。

一九七〇年代の数多くの新しい宗教運動や「若者の宗教 (youth religions)」のかなり突発的な発生もまた、戦後の宗教社会学の大規模な再方向づけの一つに火をつけることとなった。それら運動の起源、教義、組織形態、メンバーに関する初期の研究 (Wallis, 1984) は、運動が巻き込まれた諸論争、政治経済、脱会した会員のその後という新しい関心によってすでに取って代わられている (Robbins, 1988)。こうした現象を記述しあるいは説明しえたであろうような、産業社会における宗教の主要な理論はほとんど見出すことが出来ず、また、運動が「真の」宗教ではないという感じがまだ存在していたためであろうか、宗教社会学者はこうした運動に対して十分な注目を払っていない。

新宗教運動の発生と同時に、世界のあちこちの数多くの教会でカリスマ的刷新が生じ始めた。ペンテコステ現象の社会学的研究は、宗教的リーダーシップのダイナミズム (Lalive d'Epina, 1969)、保守的宗教と政治行為との

関係 (Willens, 1964)、ペンテコスタリズムが移民や社会の周辺に位置する人々を引き付けたこと (Pohle, 1960)、霊的安寧と精神的安寧との関係に關していくつかの貴重な考察をもたらした。開発途上国におけるアフロ・ブラジルのカルト (Pereira de Queiroz, 1981) といった運動に關する同様の研究もまた、宗教的刷新や宗教と政治的もしくは経済的發展との関係をよりよく理解する上で重要なものであった。

一九七〇年代後半に復興したキリスト教とイスラム教のファンダメンタリズムは、宗教社会学者の間で引き続き大きな関心を集めている。さらにこの問題は、ジャーナリストや他の社会学者の間で一時的以上の関心を集めている数少ないものの一つである。この現象によって、現代の宗教に関する有用な理論は、一部の社会学者が根本的問題は宗教的であるよりもむしろ政治的であると結論づけていると思われるまでに拡大解釈されてきた。新しい宗教運動、降霊術、ペンテコスタリズムに関する研究に關して言えば、この研究は、我々の基本的な予見を揺さぶり、たとえば、政治社会学、病理社会学、近代化

と世界システムをめぐる論争等における、概念と理論の興味深く斬新な結びつきを進展させるのに有益であった。

最後に、一部の宗教社会学者は、宗教やさまざまな宗教組織における女性の位置の視点に立つて、マスメディア、健康、治癒と生命倫理などを研究し、社会学の他の研究領域との結びつきをより強めようとしているように思われる。

私が上記で概観した新しいテーマがますます顕著になっていくのと比較すると、一九四〇年代や一九五〇年代の宗教社会学において扱われてきた主要なテーマは陰りを見せ始めているかのように思われるかも知れない。私が特に念頭に置いているのは、宗教組織、聖職者の召命と職業、チャーチとセクトの理論、教区研究、宗教と家族制度、千年王国論、無宗教、ユダヤ教、宗教と社会移動、そしてプロテスタント倫理説に関する研究である。しかしながら、こうした問題は、研究の全領域に占める割合に關しては減少したものの、依然として興味ある問題である。

宗教社会学は、その研究テーマが宗教現象それ自身の内的論理によってではなく、宗教現象の変貌する性質によって決定される限りにおいては、なんら他の社会学の各専門領域と基本的に変わることはない。宗教はその環境の諸変化に反応する。他方宗教社会学は、宗教に関する認められた諸変化に応じてその理論的見解を絶えず調整していくのである。その結果、形式理論は皆無に等しく、膨大な事後の (*ex post facto*) 論究があるだけである。

理論的鳥瞰

一九四五年以降の宗教社会学を特徴づけてきた理論の鳥瞰に関して、その紆余曲折のすべてを明らかにするにはかなりの時間を必要とするだろう。私がここで示しているのは、言葉の最も広義な意味における最も重要な理論的变化と思われるものだけである。

(i) 戦後の宗教社会学の第一の明確な方向を表しただけでなく、依然として有意義な宗教の社会的実践に関して疑問を提示しているという点においても、「宗教社会学 (*la sociologie religieuse*)」の変化に富んだ視点が、

まず第一に言及されてしかるべきである⁽¹⁶⁾。かつては英語圏で確かにもてはやされたものの、グレゴール・ヴァラデー (*Georges Balandier*)、フェルナンド・ブーラード (*Fernand Bouldat*)、ガブリエル・ル・ブラ (*Gabriel Le Bras*) に我々が負っているものを知ることとは、もはや流りではない。しかしながら、宗教実践の変容する位置、カトリック教区の進展、宗教と政治的イデオロギーの歴史的関係などへの彼らの知的好奇心は、多くの発展性を秘めた研究をもたらした (*Bouldat & Remy, 1968*)。また彼らは方法論に関する規則を形作ったが、それはフランス、ベルギー、スペイン、そしてとくにオランダにおける他の社会学者の間に、宗教社会学者のいや増す名声を確立していくのに大きく貢献した。しかしながら、「宗教社会学」は、いくつかのすばらしいフランス・ワインの流儀の中をうまく航つていけなかったのである⁽¹⁷⁾。

(ii) 宗教社会学の次の主要な再方向づけは、もっぱらタルコット・パーソンズ (*Talcott Parsons*) と彼の以前の生徒たちによって担われた規範的機能主義の増大する影響力と関係していた。この場合の宗教社会学は、すべ

ての社会科学の総合的統合的理論を目指すより広範な運動と現代性の性質から生まれた単なる間接的な副産物であった。急速な経済発展、民主主義政治、ブルーラリスティックな文化と「適応的な」パーソナリティのタイプへと、現代もしくは現代化しつつある社会を操作する場合の宗教の機能に直接関心が集まった点にその影響を見ることが出来る。規範的機能主義者が扱った主要な課題は、市民宗教、デノミネーションナルな組織、聖職者の役割、プロテスタント倫理と経済発展、セクトの制度化、そして宗教のブルーラリズムの研究である。

(iii) 次は、一九六〇年代以降英語圏の宗教社会学で支配的になった世俗化の問題である。合理化の理論にその根拠を求める研究者もいれば、構造化やあるいは社会の諸領域間の分離を理由とする研究者も見られる。この問題に関する包括的であるが競合する概説としては、アクアヴィヴァ (*Acquaviva, 1966*)、マーティン (*Martin, 1978*)、フエン (*Fenn, 1978*)、ドベラー (*Dobelaere, 1981*)、ウィルソン (*Wilson, 1982*)、フェラロッティ (*Ferrarotti, 1983*)、エルヴェー・レジエール (*Hervieu-Léger, 1986*)、

イザンベール (*Isambert, 1986*) がいる。近代化についての広範囲にわたる諸理論の目まぐるしい交代の中で世俗化に焦点が当てられたことによって、現代社会への宗教の明白な重要性は犠牲にされたものの、社会学の主流をなす論議との結びつきは保持されてきた。

(iv) ピーター・バーガー (*Berger, 1969*) が述べた聖なる「コスモス」の社会的構造に関する革新的な理論化と、同じくトーマス・ルックマン (*1967*) による社会化過程の宗教的性質に関する斬新な考察に示された「認識的」転換の重要性は、どれほど強調しても強調し過ぎることはないだろう。彼らは、一緒にあるいは個別に、哲学的人間学的方法を、産業社会におけるキリスト教だけでなく発展途上国の他の諸宗教の特殊性を分析するためにも適応した。現象学的視点もまた、社会学と宗教との境界に関する継続中の論争のための適切な状況を設定するのに寄与した。さらに、初期キリスト教の社会学的研究に現在関心が寄せられているのは、一部現象学的宗教社会学に負うものである。ドイツ語圏では、批判説もネオ・マルキスト現象学を補ってきた。バーガーの研究は、ブルー

ラリスティックな社会における「媒介構造」としての教会の妥当性と挑戦の影響を再考察する際に依然として示唆的である。ルックマンの影響は、宗教の個人化と生活世界における宗教テーマの現象学的研究において大きいものがある。

(v) 一九六〇年代半ばにおける歴史的唯物主義の構造主義と現象学への再方向づけは、宗教を多くのマルキストの関心問題として構成するのに役だった。マルキストは、つねに宗教をより包括的なイデオロギーの範疇に包含したが、唯物主義者の還元主義という最悪の行きすぎは避けられた。このことは、前産業社会や産業化の途上にある社会における宗教の社会的形成を解釈するためにはとくに有効な手段である(Maduro, 1982; Houtart, 1974; Houtart & Lemerçier, 1983; Parker, 1986; Da Silva Costa, 1985; Thompson, 1986)。そして、部分的にグラムシ(Gramsci)の理念と結びついて、いわゆる産業社会の危機における宗教的イデオロギーの位置に関する理論化を結果的に普及させることになった。近年、歴史的唯物主義者による宗教の分析の方向は、批判理論家、リベラ

ル神学者、フェミニスト神学者、黒人神学者、そして解放の神学者の間で生じている。こうしたネオ・マルキストと類似マルキスト的視点が宗教社会学に及ぼした直接的影响はわずかではあるが、一九四五年以降歴史的唯物主義がかなりの程度変容し、現在は、数を増しつつある宗教社会学者がかつてほど嫌っているわけではないという事実は、記憶にとどめておく必要があるだろう。

大急ぎで主要な理論を鳥瞰してきたが、こうした作業によって、ふたつのメタ・セオリーの考察が生じる。第一に、すでに述べたように、ルーマン(Luhmann, 1977)、スタークとベインブリッジ(Stark & Bainbridge, 1985)の業績はまったく異なった方法でその本質的重要性を示しているものの、形式理論が宗教社会学において果たす役割はきわめて小さくなってきている。たとえば、家族社会学や教育社会学と比較して、中範囲の諸理論において検証可能な仮説を提示しようとする試みはほとんど見られない。¹⁸その結果、視点に関する論争は地域的にのみ行われるものの、実証的発見をめぐる議論は比較的まれになっている。それゆえに、マルクス、デュルケム、ウェー

バー(Toole, 1984)そして時にはトレルチ(Seguy, 1980)、ジンメル(ほとんどない)の業績から得られた高度な理論的考察を説明し発展させようとするのが、すべての研究領域において盛んになった。この古典文献への関心の高まりの結果の一つとして、産業社会の登場と関わる疑問や問題を超えて研究を進めることにみられることがある。宗教社会学者は、大衆社会、高度産業社会、脱産業社会、ポスト・モダンもしくは後期資本主義社会の理論化を視野に入れることに熱心ではなかった(Voyt, 1985 および Zyberberg, 1986 参照)。わずかな例外を除いては、古典期以後のシンボリック・インタークション、エスノメソドロジー、記号学、ポスト・モダンリズムの変化に富んだ貢献に対してほとんど関心を示すことがなかった。

第二に、宗教社会学が他の社会学の分野となんら異ならないという観点に立てば、第二次大戦以後の期間は、宗教と関係する情操(emotion)の記録への関心なしに、宗教生活の経験的側面に対して次第に敏感になっていった時期であった。この点は人々の心の奥底に触れるとす

る科目の研究においては奇妙な欠如である。ペンテコスタリズムと回心の研究においてのみ情操は継続的に真剣な注目を集めてきた。しかしながら一般的にいつて、宗教社会学は、たとえば、精神の喜びとともに魂の苦しみの両方に関心を抱いてきたように思われる。宗教情操の記録がどうしたわけか宗教家にとって重要性を減じてきたのか、あるいは社会学者が宗教情操を的確に「捕まえる」すべを見出し損なったのかは、一概にいない困難な問題である。私が精一杯言えることは、宗教心理学者は情操を説明するのに社会学者ほど成功しているわけではないということである(van Belzen & van der Lans, 1986 参照)。

結論

一九四五年以降の宗教社会学の気まぐれな放浪を解釈するにはさまざまな方法が存在する。「現在の宗教社会学は茫漠たる果てしなき海原である」という嘆きが一方の極に存在する(Mo, 1985: 95)。この不平には誇張という要素以上のものがあると思われる。つまり、この不平

は、学祖たちの投げかける影から逃れようとする一部の宗教社会学によって経験されているフラストレーションを表しているのである。

もう一方の極には、宗教社会学の理論的祖先は、現在ではもっぱら無効な過程となっている、発生しつつあった産業秩序の解釈者であった、というより肯定的な認識が存在する。この新しい社会秩序には、高度産業化、脱産業化、後期資本主義、ポスト・モダン、グローバルなど様々なレッテルが貼られている。しかしながら、宗教の位置が十九世紀後半のそれとはまったく異なっているという点では、どれも一致している。さらに、宗教社会学者は、産業化や近代化の苦しみで喘いでいる第三世界の社会における宗教制度で生じている大規模な変容に対して次第に敏感になっている。それゆえに、古い神や女神へのノスタルジーが役に立つ以上に、古い理論へのノスタルジーが有用であるかどうかは、論争の余地のある問題である。

宗教社会学者は、古典の理論や諸問題への依存の程度に従ってさまざまであるが、それにもかかわらず、宗教

社会学者は、一九四五年以来宗教は社会学的にいっそう問題となっており、より論争的になっているという点には同意しているように思われる。大半の宗教組織の公的生活における衰微傾向、私化された宗教の進展、宗教制度と他の文化的諸側面との分化、そして、多くの宗教的独占の侵食は、宗教の社会的重要性もまた減少しつつあることを示しているように見えるかも知れない。しかしながら同時に、宗教社会学者は、たとえば正義、平和、生命倫理、国家の自己規定をめぐる社会的葛藤の宗教的次元の増大する重要性に、より注意を払うようになっていく。また社会学者も、法的目的のための宗教の定義、信教の自由の限界、国家との関係、教育のカリキュラムの内容をめぐる宗教的葛藤の社会的重要性に気づくようになっていく。一部の宗教社会学者も、こうした葛藤に積極的に関与している。

一九四五年当時に宗教社会学の関心を集めていた宗教の社会的機能が衰退するにつれて、新たな様式で概念化された宗教の社会的重要性はしだいに増しつつあるかも知れない、と論議することもできるだろう。こうした結

論はあまりに思索的であるかも知れないが、国際宗教社会学会(CISR/ICSR)が四十歳代から八十歳代へと齢を重ね、国際的宗教社会学会(International Society for the Sociology of Religion/Société Internationale de Sociologie des Religions)としての新たなアイデンティティが確立されていく中で、宗教社会学が目指している方向を忠実に反映しているものと私は信じている。

註

- (1) 本論文の草稿に対して有益な示唆を与えてくれたカル・ドズラー(Karel Dobelare)、フランシス・フーター(François Houtart)、ブライアン・ウィルソン(Bryan Wilson)に心から謝意を表す。
- (2) この点については今後新しく刊行される *Religion Index One: Religion Index Two: Social Compass Archives de Sciences sociales des Religions* を参照。また、有用な文献目録として Wach, 1945; Le Bras, 1956; Carrier & Pin, 1964; Desroche & Séguin, 1970; Montminy & Crysedale, 1974; Drehsen, 1980; Dobelare, 1981; Foucart, 1982; Biasi & Cuneo, 1986; Floman, 1986 を参照。
- (3) シュレーダー (Schreuder, 1966) とザイファート

(Seyfarth, 1980) によれば、このことは、一部古典の適切な翻訳の欠如に起因している。

- (4) 確かに、アメリカの社会学の存在と初期の発展は宗教に、関与した諸個人の影響に負うところが大きいということは、ほとんど衆知の事実である (Vidich & Lyman, 1985 参照)。

- (5) ジャーナルは最初オランダの KASKI (カトリック社会—教会研究所 (Catholic socio-ecclesiastical Institute) から刊行されたが、その後 *Social Compass* と改称され、一九六〇年からは FEREES (宗教社会学協会国際連盟 (International Federation of Institutes for the Sociology of Religion)) に引き継がれた。新版を刊行していた組織は、ブリュッセルにある社会宗教調査センター (Center for Socio-Religious Research) であったが、一九七一年からは Otiignies-Louvain-la-Neuve から刊行されている。編集には一九六〇年から一九八八年までゴタン (Goddijn) が、一九六八年から現在までフーター (Houtart) が当たっている。

- (6) デンロッシュは *Archives* の編集方針を、「エキュメニカルで相互信仰的、国際的、相互イデオロギー的、そして、学際的」と性格づけた (Desroche, 1965:3)。パリの宗教社会学グループは、宗教に対する幅広い学的関心だけでなく、宗教社会学グループがフランスや海外の宗教研究における大学研究科教育の体系のもとにセミナーを組織した点にも特徴があった。確かに、このグループを、調

査、出版、教育、訓練を結びつけた宗教社会科学協会に改組しようとする計画があった (Comité de Rédaction, 1971)。

(7) オランダにおけるカトリック社会—教会研究所 (K A S K I) の展開は、一九四六年当時における主要な関心があらゆる種類の社会問題や社会政策をめぐる諸問題に対する明確なカトリック的視点に立っていたという限りでは、いくつかの点において、A C S S の展開と類似していた。しかしながら、オランダの社会宗教調査協会に就いて宗教社会学へと純然たる関心を移行させることがなく、社会調査に関する世俗の研究所から感じた競合の結果、その重要性を減少させていったのかも知れない (Laeyendecker, 1967)。

(8) 非公式な短期間の会議が、一九五六年と一九五九年の世界社会学会議 (World Congresses of Sociology) の際に宗教社会学者によって開催された。一九五九年の会議の参加者は、国際社会学会の特別委員会に対して、「今後のISAの会議において、宗教社会学に関する十分かつ承認された履行されうるセクション」の地位を誓願した。ル・ブラ (Le Bras) が議長に、バーンバウム (Birnbäum) とデシロシュ (Desroche) が事務局に指名された。一九六一年にオックスフォードのヌフィールド・カレッジで開催された小規模な国際会議は、一九六二年の世界社会学会議に向けての真の国際協力と立案されたセッションへは必ずみをつけた。ワシントンDCで開催されたこの

会議の直後に、R R A と S S S R (宗教の科学的研究協会 (Society for the Scientific Study of Religion)) がメンバーとなって、ジョージタウン大学で二日間にわたる会議が開かれたが、その会議には八十三名の代表者と三十名のビジターが参加した (Shippey, 1962)。宗教社会学会調査委員会は、エビアンで開催された一九六六年の世界会議において四つのセッションを組織した。二十二名の発表者の主要テーマは、社会と宗教の変動であった (Maire, 1967)。

(9) (i) Greenwich, CT: JAI Press, *Research in the Social Scientific Study of Religion*, M.L. Lynn & D.O. Moberg (ed.), (ii) Greenwich, CT: JAI Press, *Religion and the Social Order*, D.B. Bromley (ed.), (iii) 新しいシリーズがクラーク・ルーフ (Clark Roof) の編集によって刊行予定である。

(10) エートリアントブランシャール (Adrianne & Blanchard, 1987) は、アメリカ社会学会のために、宗教社会学における講義要項を収集した。

(11) 大西洋を超えた密接な関係の機会が失われたのは、一九五〇年代後半に、ヘンリ・デシロシュ (Henri Desroche) が S S S R の会議で発表したペーパーを *Archives de Sociologie des Religions* 誌上に掲載を申し入れて拒絶されてからである (Newman, 1974)。

(12) 宗教社会学への日本での関心の高まりを象徴的に示しているのは、一九七八年日本での C I S S R の地域会議の

開催である。

(13) インドの主要な宗教に関する社会科学の業績の文献目録としては、ヴィシュナナタン (Visvanathan, 1986) を参照。

(14) 他方、国家間の分離を克服し相互の関心事を見い出そうとする、ふたつ以上のヨーロッパ諸国からの比較的小規模な専門家集団もまた存在する。たとえば、宗教社会学フランス・イタリア歴史懇談会 (Colloque franco-italien d'Histoire et de Sociologie religieuse) や宗教社会学問題学会 (Association suisse des Sociologues de la Religion) (Campiche, 1971) など。

(15) 重要な例外としては、ポープ (Pope, 1942)、『インガー (Yinger, 1946)』、『フォガティ (Fogarty, 1957)』がある。

(16) ポール・ダグラス Paul Douglas は、一九二〇年代アメリカにおいてこの種の研究を事実考察していたと論じられることがある。私は、彼を「教会成長 (Church Growth)」への今日の関心の先駆者と考えても差し支えないと考えている。

(17) まったくの独断であるが、すべてのワインは、旅の途中で壊れたり盗まれたりすることがなければうまく航海していくことができる。しかしながら、私の一般化の唯一の例外は、スカンディナヴィアのギュスタフソン (Gustafson) とアメリカのフィichter (Fischer) である。一九八〇年代の「教会成長」への関心は、「宗教社会学 (la sociologie religieuse)」と直接系統だった関

係を持たなかったが、ふたりの考え方には一部共通する要素が見られる。

(18) たとえば、ホル (Holl, 1970:466) は、F E R E S がオーバールラップする調査プロジェクトのための共有する仮説を作り出す作業を怠っていることを嘆いている。

参考文献

- ・ Acquaviva, S. *L'eclissi del sacro nella civiltà industriale*. Milano: Edizioni di Comunità, 1966.
- ・ Adriance, M. and D. Blanchard. *Syllabi and Instructional Materials for the Sociology of Religion*. Washington, DC: American Sociological Association, 1987.
- ・ Almerich, P. 'The present position of religious sociology in Spain', *Social Compass* 12, 1965: 312-20.
- ・ Alston, J.P. 'Availability of archival data in sociology of religion research', *Review of Religious Research* 18 (3), 1977: 233-42.
- ・ Barker, E. *The Making of a Moonie*. Oxford: Blackwell, 1984.
- ・ Beckford, J.A. 'The restoration of "power" to the sociology of religion', *Sociological Analysis* 44 (1) 1983: 11-31.
- ・ ——— 'The insulation and isolation of the sociology of religion', *Sociological Analysis* 46 (4) 1985: 347-54.
- ・ ——— *Religion and Advanced Industrial Societies*. London:

Unwin Hyman, 1989.

- van Belzen, J.A. & J.M. van der Lans (eds.) *Current Issues in the Psychology of Religion in Europe*. Amsterdam: Rodopi, 1986.

- Berger, P.L. & T. Luckmann *The Social Reality of Religion*. Garden City, NJ: Doubleday, 1967. (三才館蔵『社会実在の宗教』 1977)

- Bibby, R. *Fragmented Gods: The Poverty and Potential of Religion in Canada*. Toronto: Irwin, 1987.

- Birnbaum, N. 'The sociology of religion at the Fourth World Congress of Sociology', *Archives de Sociologie des Religions* 9, 1960: 111-12.

- ——— 'Nuffield College conference on the sociology of religion', *Archives de Sociologie des Religions* 11, 1961: 147-48.

- Blasi, A. & M. Cuneo *Issues in the Sociology of Religion: a Bibliography*. New York: Garland Press, 1986.

- Boulard, F. & J. Remy *Pratique religieuse urbaine et Régions culturelles*. Paris: Editions Ouvrières, 1968.

- Bourdieu, P. 'Genèse et structure du champ religieux', *Revue française de Sociologie*, 12, 1971: 295-334.

- ——— 'Sociologues de la croyance et croyances de sociologues', *Archives de Sciences sociales des Religions* 63 (1) 1987: 155-61.

- Brothers, J. 'Recent developments in the sociology of reli-

gion in England and Wales', *Social Compass* 11 (3-4) 1964: 13-19.

- Campiche, R. 'La sociologie de la religion en Suisse', *Archives de Sociologie des Religions* 32, 1971: 165-79.

- Carrier, H. & E. Pin, *Sociologie du Christianisme: Bibliographie internationale*. Rome, 1964.

- Cipriani, R. "Diffused religion" and new values in Italy', pp. 24-48 in J.A. Beckford & T. Luckmann (eds.), *The Changing Face of Religion*. London: Sage, 1989.

- Comité de Rédaction. 'Du G.S.R. à un I.S.S.R.', *Archives de Sociologie des Religions* 31 (1) 1971: 3-6.

- Conférence Internationale de la Sociologie des Religions. *Proceedings of the Tokyo Meeting of the CISR*. Tokyo, 1978.

- Da Silva Costa, M. *Religion et Ideologie dans l'Installation de la Paysannerie parcelaire du Nord du Portugal*. Louvain-la-Neuve: Centre de Recherches Socio-Religieuses, 1985.

- Daiber, K.F. & T. Luckmann (eds.), *Religion in den Gegenwartsströmungen der deutschen Soziologie*. München: Chr. Kaiser Verlag, 1983.

- Deelen, G.J. 'La sociologie religieuse au Brésil', *Social Compass* 14 (1) 1967: 53-57.

- Desroche, H. 'D'une Décennie à l'autre. De la sociographie de la pratique religieuse à une pratique de la sociolo-

gie des religions', *Archives de Sociologie des Religions* 20, 1965: 3-6.

- ——— 'Une étape', *Archives de Sociologie des Religions* 32, 1971: 3-8.

- Desroche, H. & J. Seguy (eds.), *Introduction aux Sciences humaines des Religions*. Paris: Editions Cujas, 1970.

- Dobbelaere, K. 'Trend report on the state of the sociology of religion', *Social Compass* 15 (5) 1968: 329-65.

- ——— 'Secularization: a multi-dimensional concept', *Current Sociology* 29 (2) 1981: 1-26.

- Drehsen, V. 'Selected bibliography referring to German sociology of religion and church after 1945', *Social Compass* 27 (1) 1980: 101-57.

- Elster, A.W. 'Empirical research on religion and society: a brief survey of some fruitful lines of inquiry', *Review of Religious Research* 6 (3) 1965: 125-30.

- Estruch, J. 'Sociology of religion in Spain: A critical review', *Social Compass* 23 (4) 1976: 427-38.

- Fem, R.K. *Toward a Theory of Secularization*. Storrs, CT: Society for the Scientific Study of Religion, 1978.

- Ferrarotti, F. *Il paradiso del sacro*. Bari: Laterza, 1983.

- Fischer W. & W. Marhold, 'The concept of symbolic interactionism in the German sociology of religion', *Social Compass* 27 (1) 1980: 75-84.

- Fogarty, M.P. *Christian Democracy in Western Europe, 1820-1953*. South Bend, IN: University of Notre Dame Press, 1957.

- Foucart, E. 'Sectes et mouvements religieux de l'Occident contemporain', *Etudes et Documents en Sciences de la Religion*. Québec: Université de Laval, 1982.

- Friedrichs, R. 'Social research and theology: the end of détente?', *Review of Religious Research* 15 (3) 1974: 113-27.

- Fürstenberg, F. & I. Mörth 'Ausgewählte Literatur zur Religionssoziologie', *Handbuch der empirischen Sozialforschung*, vol. 14. Stuttgart, 1979.

- Goddijn, W. & F. Houtart 'Social Compass: thirty years of publishing in the field of the sociology of religion', *Social Compass* 30 (4) 1983: 401-8.

- Gombrich, R. *Precept and Practice: Traditional Buddhism in the Rural Highlands of Ceylon*. Oxford: Clarendon Press, 1971.

- Gustafson, J.M. 'Sociology of religion in Sweden', *Review of Religious Research* 1 (3) 1959: 101-9.

- Gustafsson, B. 'The state of sociology of Protestantism in Scandinavia', *Social Compass* 12, 1965: 359-65.

- ——— 'Experimental methods in the sociology of religion: An exploratory study', *Social Compass* 13 (2) 1966: 165-66.

- Pope, L. *Millands and Preachers*. New Haven, CT: Yale University Press, 1942.
- Prandi, C. 'Religions et classes subalternes en Italie', *Archives de Sciences sociales des Religions* 43 (1) 1977: 93-139.
- Presler, H.H. 'Sociology of religion in India', *Review of Religious Research* 3 (2) 1961: 97-113.
- Reinders, J.E. & G.E. Welz, 'Bibliography on the sociology of religion in South Africa', *Social Compass* 19 (1) 1972: 103-16.
- Richardson, J.T. 'The active vs. passive convert: paradigm conflict in conversion/recruitment research', *Journal for the Scientific Study of Religion* 24 (2) 1985: 163-79.
- Robbins, T. *Cults, Converts and Charisma: the Sociology of New Religious Movements*. London: Sage, 1988.
- Robbins, T. & R. Robertson (eds.), *Church State Relations: Tensions and Transitions*. New Brunswick, N.J.: Transaction Books, 1987.
- Schneider, O. 'Sociologie religieuse et recherche socio-ecclésiastique au cours de la période 1962-1964', *Social Compass* 13 (3) 1966: 205-35.
- Schroeder, W. 'The development of religious research in the United States: retrospect and prospect', *Review of Religious Research* 13 (1) 1971: 2-12.
- Seguy, J. *Christianisme et Société: Introduction à la Sociologie de Ernst Troeltsch*. Paris: Cerf, 1980.
- Seyfarth, C. 'The West German discussion of Max Weber's sociology of religion since the 1960s', *Social Compass* 27 (1) 1980: 9-25.
- Shippey, F.A. '1962 conference on sociology of religion', *Review of Religious Research* 4 (3) 1962: 127-8.
- Snow, D.A. & R. Machalek, 'The sociology of conversion', *Annual Review of Sociology* 10, 1984: 167-90.
- Stark, R. & W.S. Bainbridge, *The Future of Religion. Secularization, Revival and Cult Formation*. Berkeley, CA: University of California Press, 1985.
- Thompson, K. *Beliefs and Ideology*. Chichester: Ellis Horwood, 1986.
- Tomka, M. 'A selected bibliography of sociological studies on religion in Hungary (1945-1979)', *Social Compass* 18 (1) 1981: 125-41.
- Vidich, A. & S. Lyman, *American Sociology*. New Haven, CT: Yale University Press, 1985.
- Viswanathan, S. 'Bibliography on social analysis of Indian religions', *Social Compass* 33 (2) 1986: 285-97.
- Vogt, E. 'The sociology of religion in Norway', *Social Compass* 13 (4) 1966: 439-41.
- Voyé, L. 'Au-delà de la sécularisation', *Lettres Pastorales. Informations officielles du diocèse de Tournai* 1 [21]

CISR. Lille: CISR, 1977.

- Wach, J. *Sociology of Religion*. Chicago: University of Chicago Press, 1944.
- ——— 'Sociology of religion', pp.406-37 in G. Gurwitsch & W.E. Moore (eds.), *Twentieth Century Sociology*. New York: Philosophical Library, 1945.
- Walls, R. *The Elementary Forms of the New Religious Life*. London: Routledge, 1984.
- Warburton, T.R. 'Religion, sociology and liberation', *Review of Religious Research* 19 (1) 1977: 90-94.
- Ward, C.K. 'Socio-religious research in Ireland', *Social Compass* 11 (3-4) 1964: 25-29.
- Whitman, L.B. 'Religious research in Europe', *Review of Religious Research* 6 (1) 1964: 2-6.
- Willems, E. 'Protestantism and culture change in Brazil and Chile', pp.91-108 in W. D'Antonio & F. Pike (eds.), *Religion, Revolution and Reform*. London: Burns and Oates, 1964.
- Wilson, B.R. *Religion in Sociological Perspective*. Oxford: Oxford University Press, 1982.
- Wuthnow, R. 'Sociology of religion', pp.473-509 in N.J. Smelser (ed.), *Handbook of Sociology*. Beverly Hills: Sage, 1988.
- Yanagawa, K. & Y. Abe, 'Some observations on the sociology of religion in Japan', pp.365-86 in *Acts of the 14th*

- Yinger, J.M. *Religion in the Struggle for Power*. Durham, NC: Duke University Press, 1946.
- Zylberberg, J. (ed.), *Masses et Postmodernité*. Paris: Meridiens Klincksieck, 1986.

(ハーヴァード大学教授)

監・坪井隆十(ミツシロ・タニジ・文化宗教講座専門職員)